

平成27年6月28日(日)

老球の細道142号

死を想う

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「日本一になるチームを作るには、家庭を壊すか、身体を壊すかしないと作れないぞ」と、ある日本のトップレベルコーチに冗談混じりに教えられたことがあった。それくらいバスケットボールのことを寝ても覚めても考えていないと強いチームは作れないということだったのだろう。私は当時30代後半だった。あれから20年以上たったが、自転車くらいしか壊せず、全国どころか福島県、会津でも十分勝てないで退職してしまった。

インカレや国体で何度も日本一に輝いた尊敬する新井先生(元市邨短大監督)は、現役コーチ時代言い切っていた。「死ぬほどの練習をしなければ日本一になれない。“熱心だ”などというレベルは県代表止まりである」と。

経済界では、経営者として大成するためには、「三つの体験」を持っていないとされている。「投獄」「戦争」「大病」という体験のいずれかである。つまり、この警句は何を意味しているかという、経営者が優れた仕事を成し遂げるためには、「生死のはざま」の体験を持たなければならないということである。極限の体験を通じて、決して揺らぐことのない覚悟と思想が身につく、そして、瞬間瞬間を大切に生き抜く術を身につける。(田坂広志著『なぜ働くのか』(PHP文庫)より)

ちなみに、「投獄」というのは悪いことをして警察に捕まることではなく、戦前の時代、自分の思想や信条のために投獄され、命を奪われる状況下に置かれたということである。「戦争」は戦争で戦地に行き、生死の体験をしたということ。「大病」とは、生死をさまよう病気のことである。

死生観とは、私のように還暦を越えた頃から持つものだろうか。お迎えが近づいたら持つものだろうか。そうではなく本来若くして持つものであると思う。なぜなら、人の命は明日をも知り得ない、いつ死ぬかわからない宿命だからである。

若くして持つことができたなら凄いことが起こるだろう。毎日死を意識して生きることができたら、できないことは何もなくなるのではないだろうか。「死ぬ気になってやったらできないことはない」。

江戸時代、鍋島藩(佐賀県)で読まれた『葉隠』の中に「武士道とは死ぬことと見つけたり」という一節がある。決して命を軽んじることを勧めているのではない。いつでも死ぬるように、いつ死んでも悔いることのないように今日を精一杯生きよという戒めである。

数年前亡くなったコンピューターで世界を変えた男、スティーブ・ジョブズは2005年6月、スタンフォード大学の卒業式で次のようなスピーチをしている。

「人生を左右する分かれ道を選ぶとき、一番頼りになるのは、いつかは死ぬ身だとしてことだと私は思います。ほとんどのこと(周囲の期待、プライド、失敗の恐怖など)が、そういうものがすべて、死に直面するとどこかに行ってしまう、本当に大事なことだけが残るからです。自分はいつか死ぬという意識があれば、なにかを失うと心配する落とし穴にはまらずにすむものです」

毎年20通以上の喪中ハガキが来る。知らないうちに多くの知人や関係者が亡くなっている。明日は我が身。死を想い、毎日を意味のある特別な日に仕上げなければならない。